

昭和46年3月1日 第3種郵便物認可
平成18年3月1日発行（毎月一回一日発行）
俳句雑誌 沖 第37巻第3号



俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

一生一郷

能村 研三

達人の授業

シルベスターコンサート

指揮棒が秒針となり年終る

弾初や顔二つ向く譜面台

雪やんで祈る形のつばみあり

潮流の藍をしるべに鶴帰る

東京・江東区のある中学校から二年生の二クラスに俳句を教えてほしいとの依頼を受けた。「達人の授業」という名前で、この「達人」という言葉にはいささか面白い思いもあったが、思い切って行くことにした。父は教師だったものの、私は学生の時、教職の授業も受けず、先生になることなど全く考えもしなかった。市川市内の小中学校には、何度か俳句の話をしてほしいと依頼を受け出向いたことはあったが、クラスごとの正規の時間割で授業を行うのは初めてであった。

江東区といえば下町で「金八先生」のイメージを少し描いて行ったが、去年改装されたばかりの綺麗な校舎で、生徒も洗練されたおとなしい子が多かった。

まず、江東区には先人にすばらしい俳人が居ることを説明した。芭蕉と石田波郷で共に区が記念館を建てて顕彰をしている。

あらかじめ俳句を作ってもらっていたので、最後の二十分位は名前を伏せた作品のコピーを回しミニ句会を行った。点が入ったり入らなかつたりゲーム性も生徒達には興味があったようで、あつという間の五十分であった。

卷 皺 を あ や ぶ み 開 く 涅槃 絵 図

柀 挿 す 父 の 指 図 を 今 に か な

料 峭 や 脚 立 抱 へ て 小 走 り に

き さ ら ぎ の 青 竹 で 酌 む 地 酒 か な

砂 洲 に あ る 黒 松 讚 へ 雨 水 か な

臍 濃 し 一 生 一 郷 棲 ま ひ か も

パチパチと火の子が遊ぶたき火かな
北風がふいていたつてうでまくり
凍りつく夜空に響く鐘の音
手のひらでとけていく雪さみしそう

俳人協会でも、ずいぶん前から小
中学校での授業で俳句を教えやすい
ように、先生達に向けた講座を開催
しているが、最近では俳人が直接学
校に向いて俳句の出前授業を行う
ケースが増えてきた。

私も俳句や短歌を若い世代にしつ
かり伝えていくには、そのおもしろ
さ楽しさを理解してもらわなければ
ならないと思っている。小学生、中
学生に今、俳句や短歌を教えても、
このままずっとそれを続けることは
難しいだろうが、いつか、この時に
教えてもらったことが蘇り、大人に
なって俳句や短歌に親しんでくれる
人が一人でも多くなることを願いた
いものだ。

能村 研三



初富士林翔

幼時のうた

昨日の事も忘れがちな健忘の年齢になってしまったが、幼時の事は不思議によく覚えている。私の入った中学校には音楽の授業が無かったが小学校の唱歌の時間に唱った歌などは、しっかり記憶しているのだ。

例えば「富士山」の歌。

頭を雲の上に出し

四方の山を見おろして

雷さまを下に聞く

富士は日本一の山

窓
広
く
開
け
ば
富
士
や
お
元
日

淑
気
か
な
不
二
と
ふ
山
が
視
野
を
占
め

青空高く聳え立ち

体に雪の衣着て

霞の裾を遠く曳く

富士は日本一の山

初
富
士
や
神
が
描
き
し
雪
の
巒

初
富
士
や
神
が
描
き
し
雪
の
巒

学校で教わった唱歌のほかに、民間で唱い継がれた数えうたのようなものも有る。

一番はじめは一の宮

二は日光の東照宮

三は佐倉の宗吾様

雪
は
被
つ
雲
は
脱
が
む
と
指
呼
の
富
士

彩雲やこれなむ富士の初ごろも

初富士にお髭のやうな雲一つ

初富士へ直角の水尾高速艇

富士を見し歓声のごと初鴉

山中湖明けたり鳩も数ふべし

頂いただき見せぬ三日の富士と訣れけり

四には信濃の善光寺

五つ出雲の大やしる

六つ村々鎮守様

七つ成田の不動様

八つ八幡の八幡宮

九つ高野の弘法様

十で東京招魂社

武男が戦争せん争に行く時に

白いハンケチハンカチ振りながら

早く帰かえって頂戴ごんごね

泣なみいて血を吐はきく不如ほじとぞす婦

招魂社まねたま（靖国神社）から、浪子と

武男の「不如婦」に移るところなど

なかなか心憎い。川島武男の出征は

日清戦争、『不如婦』は徳富蘆花の

明治三十年代の作品である。

林 翔



蒼茫集



一 桁 辻 直美

昭和 一桁きりぼしのよく縮む
冬 囲い つも 四角な国がまへ
悴みて湯となるまでの水流す
日記果つ一葉の仮名美しく
年詰まる仮に位牌を置く置
立春大吉息深く生きめやも

あかね雪 北川英子

火と水を止めし闇はや淑氣満つ
初日待つ岬にこぼれさう車列
六本木あたり五彩の雪降りをり
「雪下ろし中」と荒息受話器より
豪雪やふつと生家のなき安堵
湖すでに暮れゐて比良のあかね雪

冬 將軍 大畑善昭

新市成る雪の早池峰山も容れ
喪中新年すずめらに餌を撒き
下枝みな雪に埋まりなほも雪
月を来て月の匂ひの雪女
冬將軍暴れまくるを誰も止めず

三日の音 千田百里

新生「沖」

滑翔の鷹に男時のとこしなへ
米二合磨ぐや三日の音たてて
隠密のやうに黒猫炉辺語り
木枯は過客よ樹々を我を撫で
住処ごと僅かづつ老い葉喰

潮鳴集



途中 藤井みち子

考へてゐる凍滝となる途中
歳晩の缺を入るる日高昆布
寄生木の内のうやむやクリスマス
いきものに疵なきはなし柿落葉
わがたつる音の中ゆく枯木山

迎春花 富川明子

切干や掌にあたたかき嵩となり
喪の家の白々とあり迎春花
紅筆や姉妹寄り合ふ小正月
をさな児とゐて枯落葉追ふあそび

送電 坂ようこ

去年今年送電五十万ポルト
本堂の振り時計の鳴る寒さ
峡の空すかと片づき木守柚子
天心へ凍滝の凍まつしぐら
水鳥のとびルネッサンス・沖発つ羽音明日信ず

父癒えよ 大川ゆかり

日溜りにふくるる鳩や漱石忌
寒満月の強き光や父癒えよ
麻痺の手に雪のつめたさ伝へみる
風花や父の睫毛の長きこと
さざ波は鯨の尾より生れし波

沖作品



能村研三選

神奈川

福島 茂

鯨の尾水平線を跳ね上げる
鯨棲む海に網の目緯度経度
停泊の船のまるごとクリスマス
つくねんと母の鏡台冬座敷
昼の月そのまま寒の月となる
剣玉に膝やはらかき小春かな
ポケットに残る半券冬木立
やさしさの膨らんでくる布団かな
揺れ残る木の葉のすくふ光かな
大根引く引いて近づく地平線
焼芋を二つに割れば海の荒れ
水鳥のこ糸夕闇を曳きにけり
朝刊を円錐積みに駆師走
煤逃や水族館に回遊魚

千葉

篠藤千佳子

埼玉

服部早苗

千葉

佐々木よし子

メール・メール・腕組みメール暖房車
飛驒にきて炉火美しき座をもらふ
冬あたたか古墳をのぼる土竜塚
鳥の声よく響く日や蒲団干す
白鳥の辞儀交々に愛生まる
しろがねの富士くつきりと大根干す
翼に日乗せて白鳥着水す
手招きの形に落ちぬて黒手套
終着の駅綿虫が顔を打つ
寒紅やきりりと構へ一の弓
鍵束に新しき鍵去年今年
着信の音に顔あり冬ぬくし
寒波きてフオッサマガナの深まれり
青空の臍へ臍へと凧上げむ

神奈川

菅原 健一

裸木に見る夢ありし吾になし
聖夜来る木馬は脚を宙のまま
相伝の盃は加賀ぶり年酒酌む
師は誰とも一対一ぞ初句会

千葉

安藤しおん

船宿の魚拓あを墨春兆す
月光の水鳥つつみ子守歌
いとこ煮や三三五と炉に集ひ
手袋のままに指切りふと不安

上田 玲子

大王松生けて若水神宿る
柚子風呂やまだまだ大き父の背
若水の杓に張力生れにけり
天空へ懸くる梯子や出初式

東京

石川 笙児

冬日向獅子肉球を曝しけり
縮尺の地図に赴任地雪の頃
九十九里砂に記憶の初日の出
風と日の余慶にひたる凍豆腐

齊藤 實

葉牡丹に伴天連襟の気品あり
異星人のごとく聖樹の街にをり
北斎の白波荒ぶ虎落笛
中腰でロボット駆ける師走かな
初明り翔びたつもの羽音せり
いななきをかき消す岬の猛吹雪
冬海を見てきし馬の列に会ふ
尻屋馬雪搔きあきて沖を見し

青森

小野 寿子

寒風裡飼葉たちまち舞ひ上る
淑氣満つ神宮池の波荒し
父と子の鋸談義 祝箸

奈良

福山 悦子

煤逃げのリユックはみ出す杖の首
ジョンレノン枝雀もよろし外は雪
白障子透かす華やぎ婚話
笹鳴きのあたりひとしほ闇溜る
咳ひとつ闇に吸はれし除夜詣

愛知

三好千衣子

氷見沖の空へ濤打つ鯨起し
日向ぼこ先祖の果てに吾ありぬ
数へ日の油のやうな隅田川
時雨るるや遠き列車に日当たりて
星々の森へと帰る雪晴れて

埼玉

渡辺 鮎太

どげう屋へ繰り込む大き熊手かな
雪吊に一筋だにもなき弛び
しんがりを走りきつたる淑気かな
安心の 大き膝なり初笑

神奈川

堀口 希望

初湯して猷体の身のかるさかな
正座することより習ふ初稽古
木の間より沖見えてくる恵方道
香り良き酒ふるまはる厄詣
懐手二言三言して別れ
手のひらにつむじ風ある二日かな
冬の霧より削りだす磨崖仏

神奈川

矢崎 昌

沖作品 15 句選評

*

能村研三

鯨の尾 水平線を跳ね上げる 福島 茂

沖の果てに見える水平線を見ていると、何か不思議な力を授かるような気持ちになってくる。地球が丸いことも知識として理解しているから水平線のさらに向こうにも無限の大海が広がっていることを想像している。その水平線をしばらく見ていたら、突然変化がおこった。最初は何かしつかり確認が出来なかつたが、どうやら遙か彼方にある物体が鯨であることが判った。水平線を瞬間的に突起させた鯨の尾を発見した時は大きな喜びがあった。単なる情景句として捉えるだけでなく、作者の力の漲った心眼を感じさせてくれた一句でもあった。

劍玉に膝やはらかき小春かな 篠藤千佳子

劍玉は大正時代に考案された遊戯だが、今は子供たちだけでなく老人たちの軽いスポーツとしても愛用されている。私も決して器用ではないので、旨く玉を皿にのせることは出来なかつたが、楽しく遊んだ記憶はある。旨い人のやり方を見ているとやはり構え方が違つて足を少し開き肩の力を抜いて膝を柔らかく曲げて、気持を集中させタイミングを図つて一気に玉をのせる。上達するには、毎日の練習と膝の使い方だとも言われている。作者も小春日の一日に遊んだ劍玉の体験がしつかりと句に描かれた。

煤逃や水族館に回遊魚 服部 早苗

上五が「や」で切れているから二句一章の句として読んだ。二句一章の句は、俳句の中に句切れを入れて季語を含む部分とそれ以外の部分に分けると、二つの概念が融合して一章を形成するという考え方である。たしかに、煤逃の逃げた先が水族館と考えるのもよいが、「煤逃」と「水族館の回遊魚」との二物が存在している。この二つは互いに独立していて、その二つが対比され強く響きあっている。煤逃は現代風と言うならば、大掃除のあいだ足手まといになる子供や老人がどこかに一時退避することだが、一旦は暮の忙しい家庭から開放された奔放な気持はあつても、所詮は水族館の回遊魚と同じように管理された中をぐるぐる回っているに過ぎないのかも知れない。

(以下略)